

# 信濃教育会編『国語』教科書の研究

小口 政英

## 一 はじめに

現在小学校で用いられている教科書は六種類であるが、教科書の歴史をたどってみると、実に多くのものが編まれ使用されてきた。戦後、教科書が検定制度となつてからに限定しても、教育のありかたを模索しながら様々な教科書が編まれてきた。そうした中に、全国的な組織をもたない地方の一教育団体が、現場の教師を中心に編纂した教科書があった。それが、昭和二十九年から昭和四十五年にかけて発行された信濃教育会編『国語』教科書である。

この教科書の意義について、歴史的側面・内容的側面・実践的側面の三つの側面から探ってみた。

本稿では、紙幅の関係から実践的側面を中心に信濃教育会編『国語』教科書の意義について述べてみたい。

## 二 信濃教育会編『国語』教科書の実践的活用

↳ 単元「年よりの ちえ」を中心に

### 1 単元「年よりの ちえ」の趣旨と指導目標

単元「年よりの ちえ」は、昭和二十九年から昭和四十五年まで、信濃教育会編『国語』教科書が発刊されている間ずっと小学校三年生用（上）の教科書に取り上げられてきた。単元の内容も、その間、物語「年よりの ちえ」とその話をもとにした紙芝居作り「紙しばいを作ろう」によって構成されてきた。

昭和四十三年度版の信濃教育会編『国語』教科書学習指導書によると、本単元の趣旨が以下のように示されている。

人間愛を基調とした長編の民話、場面の情景や登場人物の気持ちの変化に着目しながら愛情の深さ、美しさにふれて、読み味わうことは、読解と鑑賞の力をのばすうえにき

わめてたいせつなことである。

児童は、昔話や民話に興味をもっており、かなり長文でも持続して読みとおせるようになってきている。また、これを紙しばいにして演出することにも関心を示すようになってきている。

この単元では、「年よりの ちえ」の読みを中心に、長文の読解力と鑑賞力を育て、その紙しばいを作る基本的な学習をおして、物語の読みをさらに深めるとともに、言語表現力をいっそう高めようとするものである。

このように、本単元は物語「年よりの ちえ」において読解鑑賞力を育て、その紙芝居を作る活動を通して、さらに作品の内容を読み深めるとともに言語表現力を高めるように構成されている。

## 2 物語「年よりの ちえ」の教材解釈

物語「年よりの ちえ」は、長野県の民話を題材とした作品である。信濃教育会編『国語』教科書には、森嶋外ほかによる「標準おとぎ文庫」を典拠としたものが載せられている。主な登場人物は、殿様と百姓と百姓の母親であり、内容は七十を過

ぎた年よりを島流しにしていた、年より嫌いな殿様が、百姓の母親のちえによつて国を助けられ、改心するというものである。

この話は、長野県更埴地方に伝わる姨捨伝説をもとにしている。「大和物語」には地名の由来となった年寄りを捨てることしか書かれていないが、現在一般的に伝わる姨捨伝説は、信濃教育会編『国語』教科書に載せられているような、年寄りの知恵と結びついた話となっている。また、本教科書では難題として玉の穴に糸を通すことが載せられているが、他に伝わる話では、灰で縄を編むこと、何もしなくてもなる太鼓をつくること、馬の親子の見分け方などをあげた話も伝わっている。

本教科書には、小学校三年生版（上巻）の最後の単元「年よりの ちえ」として、十六ページをとつて、百姓が母親を山に隠しに行く場面と母親の知恵によつて国が救われる場面の二つに分けて、作品が載せられている。

登場人物の殿様と百姓の母親は、対比した位置におかれ、その間で心ゆれる百姓の姿を描いている。つまり、島流しにすることは年よりだからしかたがないと考える殿様と島流しにされることは殿様の命令だからしかたがないと考える母親のそれぞれの現状を肯定する思いに、疑問と批判と行動をしめす百姓によつて話が展開しているのである。百姓がこの作品の初めから終わりまで登場し、作品の流れをひっぱっていることから、この話の主人公を百姓ととらえることができる。

実際、昭和四十三年度版学習指導書では、本文の主題を以下のようにとらえている。

山奥にかくした年よりのおかあさんの知恵で国を救いわが  
ままなどのさまの心を改めさせた親思いのおひやくしょう

この解釈は主人公をお百姓においたものである。

しかし、この作品の題名「年よりの ちえ」をみたとき、主人公や主題をこのようにとらえてよいものかという疑問がうまれてくる。この題名に決められた「年より」とは、年をとつた人という大きな括りでの年よりというともえもできるであろうし、作品の登場人物に限定した七十才になつた百姓の母親というしぼつたとらえもできるであろう。そのいずれにしても、作品の視点は年よりの姿や行動にあると考えることができる。この主人公や主題のとらえのゆれは、教科書編集者の側にもあり、昭和四十三年度版学習指導書以前の指導書の主題の記述は、昭和四十三年度版のそれとは異なつたものである。

昭和三十六年度版学習指導書ではこの作品の主題を次のように示している。

年よりのおかあさんを、山のほらあなにかくしてそのおかあさんの知恵で国を救い、わがままなどのさまを改心させ

た親子の愛情。

また、昭和三十九年度版学習指導書では次のように主題をとらえている。

島流しにされる年よりのおかあさんを、山のほらあなにかくし、そのおかあさんの知恵で国を救いわがままなどのさまの心を改めさせたしみじみとした親子の愛情

この二つの主題のとらえは、作品の中心を百姓の姿だけに限定せず、母親の姿も含めた親子の愛情と考えている。

では、このように主題の解釈にゆれをもつ教材を、子どもたちにとどのように指導したらよいのであろうか。昭和四十一年度と昭和四十二年度に行われた、信濃教育会編「国語」教科書の実験評価研究会を参観した、当時信濃教育会編「国語」教科書研究室主任であつた宮下忠道氏がこの教材の扱いについて、『文学教材の学習指導』（信濃教育会出版部・昭和四十四年五月刊）の中で言及している。ここでは「年よりの ちえ」に関する全文についてはこれを省き、宮下氏が指摘した指導上の三つの問題点の要点のみを示す。

① 話そのもののおもしろさを味わうことなしに、理知的に一つのまとめを出そうとする点

② 「年よりの ちえ」のまよめの学習指導について全体としてまとまりがつかないというか、急所を突かないまままで終わってしまうくらいがある点

③ 「年よりの ちえ」という単元名が示す意味をとらえきれていない点

①については、十分な話の筋をたどって表現に即しながら場面状況を明確にして話のおもしろさに浸らせていないことへの批判である。ただ思えばかりを問うていた教室が多かつたことを示している。

②については、終末部分の取り扱いの不十分さを指摘している。終末の取り扱いで多いものとして、事件的展開に目を注いだあと、このお話のいちばん好きなところを書き抜かせて感想を言わせるだけで終わったり、お百姓の気持ちや殿様の心の変化を考えさせたあとで感想を書かせて終わったりという授業を上げている。もう少し教材研究を進めて、物語のはじめと終わりを比べ、子どもたちに殿様の心の変化を対比的にとらえさせることが必要であると指摘している。

③については、「ちえ」のとらえの不十分さを指摘しているのである。

ならば、教科書作りをした指導者のこうした解釈に対して、実際にこの作品を教室で読む小学生の子どもたちは、この作品をどのようにとらえたであろうか。

### 3 北原淑郎氏の実践事例

信濃教育会編「国語」教科書三年生版に掲載された教材「年よりの ちえ」は、長い間、たくさん教育現場で実践されてきた。そうした中で、当時実践された授業の詳細な記録が残されている。それは、昭和三十三年八月二十一日〜九月十五日まで、松本市立源池小学校において行われた、北原淑郎（きたはら・としろう）教諭の授業の記録である。北原教諭は教員生活十年になるうとしていたが、それまでも文学教育の可能性について深く研究を進め、多くの場でその成果の発表を行っている。北原教諭の行った授業を通して、物語「年よりの ちえ」がどのように子どもたちに受け入れられていったかを考察したい。

### 4 北原淑郎氏の授業構想

「年よりの ちえ」を扱うにあたって、北原教諭はその目的を学習指導案に以下のように記している。

今、児童は童話、社会科的理科的な読み物や図鑑、昔話などさまざまな方面の本を読んでおり、伝記・歴史物語なども興味を広がつて来ている、そしてそうとうな長文でも持続して読み進められるようになってきている。こういう時期の児童の心情を豊かに培うために信濃の国に伝わる昔話に取材した「年よりのちえ」を取り上げ、真実な人間愛の深さを感じ取り、作品鑑賞の経験を豊かにすることをねらいとした。そして児童の読書生活が徐々にではあつてもさらに高められるを期するものである。

この願いにそつて、授業は展開された。

#### 5 教材「年よりのちえ」の子どもたちのとらえ

北原学級の子どもたちは、初発の感想としてこの教材を以下のようにとらえている。(文言は子どもが書いたままを載せてある。)いくつが抜粋しよう。

- ① とのさまは人殺しみたい。島流しになった人は、どうしているだろうな。
- ② ぼくがとのさまだとしたら、島流しなんてしない。へ

んなことはやらせないし、こんなにおこらないしこんなかりなんかしないほうがいい。それから、ぼくがとのさまだったら、とのさまなんて島流しにしてしまう。

- ③ となりの国とのさまは、自分で玉に糸を通さないで、こつちのとのさまに通させといて、通さなければあなたの国をせめるなんて、こすいと思つた。おひやくしゅうは、島流しにされるおかあさんを助けるし、おかあさんはおひやくしゅうが道に迷わないように枝を折つたり、二人ともなががいいと思つた。むかしなのに「あなた」ということはが使つてあつたが、このことははおしたと思つた。とのさまは、年寄りが大嫌いで、年寄りを見ると機嫌が悪くなるなんて不思議だつた。
- ④ おひやくしゅうはよほどおばあさんが好きだと思つたが、山奥へ連れて行くなら島流しにしてもいい思つた。こがねひめと少し似ていた。

- ⑤ 島流しにする国が今でもあつたらいやだなと思つた。この国とのさまははじめのうちは悪いとのさまだったが、後になっていいとのさまになってよかつたと思つた。

- ⑥ 七十になつた人を島流しにするなんて七十になつた人はかわいそうだ。とのさまは始めのうちはあんまりいいとのさまではなかつた。隣の国とのさまも、あんなク

イズをやらないうつていいとぼくは思った。おひやくしゅうのおかあさんは知恵があつたりやさしくていいおかあさんだと思つた。おひやくしゅうもいい人だつた。

子どもたちの感想を読んでみると、登場人物のそれぞれに自分なりの感想をもっていることがわかる。殿様に対しては、①や②のように悪い人であると考えている子どもが多い。しかし⑤のようにいい殿様にかつたという読み取りまでしている子どももいる。百姓については、③や④のように母親への思いに気づいている子どもたちがいる。母親については、③や⑥のように母親の持つ知恵のすばらしさややさしさを感じている。

#### 6 「年よりの ちえ」に対する興味関心

子どもたちは、「年よりの ちえ」に対して、興味関心はどうであつたらうか。

◆「年よりのちえ」のお話は、おもしろかつたかどうですか。つぎの四つの中から一つえらんで文の上に○をつけましよう。

- ・うんとおもしろかつた…一人
- ・おもしろかつた…十五人

- ・おもしろくなかつた…五人
- ・おもしろいとおもしろくないとも思わなかつた…十五人
- ・その他…八人

おもしろいということはどうとらえているかで、おもしろさはかわつてくると思うが、初発の感想ではおもしろいと感じない子どもたちが半分以上いることに、この作品が三年生の子どもたちにふさわしいものかどうか考える必要が生じてくると思われる。北原学級では、第二十時に、同様な質問をしている。学習後の感想である。その結果は次の通りである。

◆「年よりの ちえ」のお話は、おもしろかつたかどうですか。つぎの四つの中から一つえらんで文の上に○をつけましよう。

- ・うんとおもしろかつた…五人
- ・おもしろかつた…十六人
- ・おもしろくなかつた…一人
- ・おもしろいとおもしろくないとも思わなかつた…十五人
- ・その他…六人

おもしろくなかったと感じる子どもの数が減り、うんとおもしろかったと感じる子どもの数が増えた。これは学習を通して教材のもつ内容の深さを学んだ結果であろう。

では、本教材を現在の教育課程にあてはめたとき、どのような価値をもつであろうか。次に物語「年よりの ちえ」を現在の小学生にあてえた授業の実践を報告し、信濃教育会編「国語」教科書教材の現代的価値について検討する。

## 7 教材「年よりの ちえ」の現代的価値についての仮説

以下の四点について着目し、小学校四年生に授業を行うことを考えた。

- ① 民話を教材に取り上げる現代的価値
- ② 主題をつかませる教材としての現代的価値
- ③ 登場人物の心情をとらえる教材としての現代的価値
- ④ 国語の教材としてとりあげる現代的価値

①については、本教材が長野に昔から伝わる話に取材した民話であるからである。現在の教科書にとりあげられた教材のなかには、民話は少ない。光村図書発行平成九年度版国語教科書

の小学校四年生用の場合では一つもとりあげられておらず、教室で授業されることもあまりない。そういった状況の中で子どもたちに本教材をあたえるところどういう反応を示すであろうか。聞き伝えられてきた話という性格からして、子どもたちは、興味深く読み込むのではないだろうかと思われる。

また、本教材「年よりの ちえ」は「おぼすて山」とか「うばすて山」といった題名で知られているお話でもある。授業を行う学級の児童は、姨捨山（冠着山）のそばで育ってきた子どもたちである。身近な地域に伝わるお話という点からしても積極的な学習が望めるのではないかと考える。

②については、本教材が比較的内容を読み取りやすく話の展開もあまりむずかしくないため、主題をつかむ学習には適した教材ではないかと考えるのであるが実際にはどうであろうか。本教材の主な登場人物は、殿様・母親・息子の三人である。そして、自分のことを中心に考えるわがままな殿様と、まわりの人に気遣いをする心優しい母親、母親を思うあまり掟を破り母をかくまい思い悩む息子、という比較的単純な人物設定となっている。また、話の展開も唐突な変化がなく内容の解釈に差異が出ないと考えられる。主題のとらえについてはむずかしい点も考えられるが、題名を考えあうことによつて、追っていけるのではないだろうか。

③については②同様、物語の展開が複雑ではなく、叙述され

た言葉や行動によって登場人物のこころの動きがつかみやすいと考えられる。宮下忠道氏の指摘した、隣国から与えられた難題を解いたときの、殿様と百姓との応対場面でのそれぞれの気持ちの読み取りを中心に考えてみたい。

④については、この作品の今日までの扱い方に興味深い点があるからである。それは、本教材が国語科と道徳の両方で取り上げられてきた点である。

昭和二十九年（昭和四十五年まで使われていた信濃教育会編集の国語の教科書では、「年よりのちえ」という題名で載せられていた。しかし現在その教科書は廃刊となり国語科の教材としては取り上げられていない。ところが、信濃教育会編集の四年生の副読本「わたしたちの道」では現在道徳の題材としてとりあげられている。

同じ長野県の小学生に、時を経て、一方では「国語科」の教材として、また一方では「道徳」の教材としてとりあげられている意味はどこにあるだろうか。授業での扱い方にもよるであろうが、子ども達はこの作品を読んだときまずどういふ反応を示すであろうか。そのことによってこの作品をどう扱っていくのがよいか考えていきたいと思う。

## 8 教材「年よりのちえ」の現代的価値についての考察

### (1) 民話を教材に取り上げる現代的価値についての考察

第一時で、こうした内容の話を読んだり、聞いたりしたことがあるか子どもたちに聞いてみた。結果は三十七名中三十二名が知っていると答えた。これはこの話が子どもたちにとって身近な話であったということである。では、他の民話に比べてはどうであろうか。滝澤晃の行った民話調査がある。（一九九七年）この調査は、長野県の主な民話について長野県の子どもたちがどの程度知っているかを調べたものである。その調査が本学級でも行われたのでその結果を参考にしてみると、「おはすて山」（「年よりのちえ」とか「うばすて山」とか呼ばれているものも含む）の話は、他の民話くらべても良く知られていることがわかる。

しかし、これは民話として子どもたちによく知られているのか、それとも身近な地域を舞台としているからなのかこの調査だけではわからない。このことについては他地域の子どもたちと比較してみる必要がある。

いずれにしても本学級の児童にとっては親しみやすい話であったといえる。

では話の内容についてはどういう反応を示したであろうか。

これも第一時に、おもしろい・ふつう・おもしろくないの三段階で子どもたちに感想を聞いてみた。結果は三十七名中、二十



八名がおもしろい、六名がふつう、一二名がおもしろくないと答えた。おもしろくないと答えた子どもの理由は、「知っている話だから」とか「なんとなく」といったものであった。

初発の感想はどういうものだったろうか。以下に主なものを示す。

(松澤) おばあさんが、いい知恵をつかったからおばあさんがたすかったしこぼつびをもらうことかできた。

それに、お百しようさんもおばあさんを山にかくしてあげたからおばあさんが助かった。二人とも助け合ったんだなあと思つた。最後にとのさまもわかってくれてよかった。

(篠井) わがままなどの様とかも出てきたけれどお百しようさんのやさしさや心づかいがとてもよかった。

(百瀬) とのさまは年よりが大きらいだったけれど、気持ちや大事にしていてよかったなと思つた。お百しようさんはとてもじゅんすいなんだなと思つた。

話の展開におもしろさを感じる子どももあつたがここで取り上げた子らのように、内容のおもしろさに気づいている子どもたちも多かったです。

## (2) 主題をつかませる教材としての現代的価値についての考察

本教材の主題を問うにあたって題名づけという手立てをとつた。これは作品にふさわしい題名をつけるということを通して、作品の読み取りを深め作品の特徴をつかむのではないかと考えたからである。

子どもたちは作品のどういった記述に目をむけていったであろうか。題名づけは、教材を読み始めた第一時と学習のまとめをする第六時につけさせた。

まず学習のはじめにつけた題名をみてみると、登場人物に寄せた題名（「くのおばあさん」といった類い）が三十七人中二十三人であった。そのうち殺様によせたものが五人、百姓によせたものが五人、母親によせたものが十九人であった。（一つの題名に重なるものもあるので、合計が二十三人にはならない）これをみると、子どもたちの意識は、母親の姿に向いていることがわかる。また、知恵だとかたいせつさという価値感に意識が向いた子どもはどうだろうか。「おかあさんをたいせつに」「心と心70から」「としよりのちえ」「おばあさんのちえ」「おばあさんのとんち」「おとしよりにはちえがある」というのをこの範疇に入れると、六人が考えたことになる。その他は八人である。この人数が学習後になると、登場人物に寄せた題

名が二十六人、そのうち殿様によせたものが五人、百姓によせたものが十一人、母親によせたものが二十人であった。また、価値感に意識がむいた子どもは、十人である。そしてその他は二人である。

これらのことから、本教材に対する子どもたちのとらえ方は、あまり題名を意識せず、登場人物の人物像に目がいつていることがわかる。また、主人公と考えられる人物については、母親によせた題名が多いことから母親と考えている子どもが多いと考えられる。

主題をとらえるということは、話の流れが比較的つかみやすいにもかかわらず、むずかしい教材であると考えられる。七時間扱いの授業であったが、教材の内容に深く迫るためにはもう少し時間が必要だと思われる。

### (3) 登場人物の心情をとらえる教材としての現代的価値について

子どもたちは内容の読み取りには、あまり時間を必要としなかった。難語句として「さかもり」「島流し」「きぬの糸」などをあげた。宮下思道氏の指摘した、隣国から与えられた難題を解いたときの殿様と百姓との応対場面については、題名をつけた理由を話し合うときに話題にした。

子どもたちははじめ、殿様を「いじわる」「わがまま」な人ととらえ、百姓を「やさしい」人ととらえるものが多かった。どこがいじわるでどこがやさしいのかという理由を問うことによつて、物語全体を通した殿様や百姓の性格に迫ろうと考えた。そうすると、子どもたちの中から「殿様はずっといじわるだったわけではない」と変化する心を見出し出てきた。矢野が題名を「やさしいお百しようさんとお母さんといじわるなどのさま」から「ちえのあるお母さんとやさしいお百しようさんとさいごにやさしくなったとのさま」とかえたのは、この話し合いのためであろう。

ただ、百姓の「やさしさ」に対する疑問はわかかなかったように、殿様の命令を一人だけ破つて母親を助けたという点には気づかなかつた。したがって百姓のとらえは授業後も「やさしい」「いい人」という姿だけであつた。

宮下氏が指摘するように、本教材は「十分な話の筋をたどつて表現に即しながら場面状況を明確にして話のおもしろさに浸らせる」必要のある教材であるだろうし、「物語のはじめと終わりを比べて」学習すべき教材であるといえる。話の展開だけでは興味深く理解しやすい教材のように思えたが、じっくり時間をかけて三人の登場人物の心の動きを探っていく必要がある、内容的に重みのある教材といえそうである。

#### (4) 国語の教材としてとりあげる現代的価値についての考察

子どもたちの生活に根ざした教材を与える大切さという点については、(1)でも指摘した通りである。子どもたちの生活に身近な教材を与えることは、教材に対して興味深く取り組ませることができるといふことである。この点については、昔の子どもたちも今の子どもたちも同じではないかと思われる。では本教材の国語的価値という点についてはどうであつたらうか。

授業にあたっては、次の三つの目標を立てた。

- ・登場人物の行動や気持ちを考えて、作品の主題を読み取ることができる。
- ・登場人物の気持ちの移りかわりや場面の様子がわかるように音読を工夫することができる。
- ・民話に興味をもって読み通すことができる。

私はこの教材の主題を次のようにとらえた。

「殿様のところを改心させたり、国を救つたりもする、経験によつて得た母親の知恵のすばらしさ。」

作品の中で対比関係にあるのは、母親と殿様であり、その間

を行き来しながら、殿様の心を変えていくという息子である百姓の果たす役割は、物語の展開の上で大きい。しかし、そこでは百姓の行動が殿様の思いをかえたというよりも母親の知恵が殿様の心をかえていったと考えるほうがよいのではと考えた。子どもたちの考えた題名にみる主題のとらえはどうであろうか。

「ちえ」というものに目をむけたのは、最終的には、「ちえのあるおばあさん」とか「ちえのあるおかあさん」とか人物の特性として、「ちえ」をとらえたのは八人である。「人の心をつなげるちえ」とか「としよりのちえ」とかのように、「ちえ」そのものに焦点をあてたとらえ方をしたのは、六人である。その他では、「国をすくつたおばあさん」としてその理由の中に知恵を含めているし、「なんでもできそうなおばあさん」として知恵の持つ力をとらえている。同じような考えも六人いた。このように考えれば、本授業ではこの作品の主題である「母親のちえ」に迫ることができたと考えてよいのではないだろうか。

また、民話への興味は既述した通りである。第七時に、本単元で扱った以外の作品を紹介すると図書館や家庭から持ちより、休み時間などに読んでいる姿が見られた。

以上のような考察から、本教材を現在小学校国語で扱うことは有効であると考えられる。しかし、民話の持つ特性でもある

うが、説論じみた展開になることによつて、価値観を児童に強く押し付ける傾向に陥りやすいようにも思われる。例えば「おあさんをたいせつに」とか「おばあさんはたいせつに」とかという題名にはその傾向が見られる。この作品を扱うには・宮下氏が指摘したような・殿様と百姓の葛藤場面や母親の何げないしぐさについて、じっくりとそれぞれの心情を考えることが望ましいと言えよう。

以上のことから信濃教育会編『国語』教科書がもつ特性が、子どもたちの心と言語能力の高まりを生む要素を持ち合わせていることがわかる。

### 三 おわりに

ここまで、実践的側面から信濃教育会編『国語』教科書の姿をみてきたが、歴史的側面・内容的側面からもその姿は明らかになってきた。

信州教育の歴史的流れをみてみると信濃教育会編『国語』教科書が生まれるべくして生まれた状況があつたように思われる。

なぜなら、それは、自ら教材を見いだし、目の前にいる子どもに合わせた自主教材作りの伝統があり、その延長線上に信濃教育会編『国語』教科書が位置づけられ、そこに、西尾実と

いう理論的バックボーンを得たことによつて、教科書作りが可能となつたと考えられるからである。この伝統と理論は、今も長野県の国語教育に強い影響を及ぼしている。

また、信濃教育会編『国語』教科書の内容についてみたとき、信濃教育会編『国語』教科書に載せられた教材は、子どもたちの日常を取り上げ、言語活動を仕組んでいるものが多かった。それは、西尾の「実の場」を重要視する考えにもとづいたものであり、また、指導においては、音声言語を大切にしている点によるものと思われる。この日常生活に基点をおいた国語学習の在り方は、西尾理論とともに今も輝きを失っていない。

このようにみると、信濃教育会編『国語』教科書が残したものは、次のように整理されよう。

- ① 教材作りの伝統
- ② 子どもたちの日常生活、特に音声言語生活を大切にし、実の場を尊重した指導という考えを具現化した教材作り
- ③ 国語教育でめざすものが、単なる言語技術的ではなく、心を含めた人間形成をしめすものであることを具現化しようとしたこと

信濃教育会編『国語』教科書は、単に一地方の教育団体が一

時代において編集をした教科書という歴史的意義を有している  
ということのみならず、現在及び未来においても、心すべき国  
語教育の在り方に示唆を与える内容を持つ教科書であったと考  
えられる。そして、それは、生活に根差した教材や学習が国語  
教科書にとって重要であるということをも示唆している。

※付記・本論稿は平成九年度信州大学修士論文「信濃教育会編  
『国語』教科書の研究」を整理要約したものである。詳しくは  
そちらをご覧ください。

(おぐち まさひで 長野市立通明小学校教諭)